日本口演童話史

内山憲尚編

文化書房博文社

検印省略

日本口演童話史　定価　一五〇〇円

一九七二年三月五日　初版発行

企画　日本童話協会

編者　内山憲尚

発行者　鈴木貞義

発行所　文化書房博文社

東京都文京区目白台一～九～九

電話　東京（九四七）二〇三四（代）

振替　東京八六九五五

郵便番号　一一二

印刷　協同印刷株式会社

製本　明光製本株式会社

© 1095—80460—7361

はじめに

木村小舟の「少年文学史」を始め、児童文学史に関する本は随分たくさんに出されているが、児童文学史であり、文学によって発表せられた、読みものとしての文学史である。

童話には児童が自ら読むものと、それを話して聞く、口演童話とがある。わが国の口演童話は世界に類例を見ない程、特殊な発達をして来た。

しかるに、この口演童話の史的発達については、今までの童話史においては殆んど触れていない。口で話すものは消えやすい、今日文字にして残こしておかなければ、その歴史はわからなくなってしまうだろう。

本年は日本童話協会が創立されてから五〇年にも相当するので、それの記念の意味も兼ねて、全国の同志にお願いし、この「日本口演童話史」をまとめることにした。全国の口演童話の歴史をまとめることは大変である。

幸い、先輩同志の方々のご協力によって、体裁だけは整った。お力添えに対し心からなる感謝をささげる。

昭和四六年一〇月

編集委員代表　内山憲尚

日本口演童話史　目次

はじめに

第一部　東京都

一、巌谷小波……（三）
二、久留島武彦……（二〇）
三、岸辺福雄……（二八）
四、天野雉彦……（三五）
五、芦谷重常……（四三）
六、松美佐雄……（五一）
七、回字会……（六二）
八、大塚講話会……（六四）
九、奈良島知堂……（六五）
十、内山憲尚……（六八）
十一、樫葉勇……（七六）
十二、安倍季雄……（八三）
十三、日本童話協会……（八九）
十四、東京童話会……（一〇〇）

第二部　道府県

一、北海道……（一〇七）
二、青森県……（一一四）
三、秋田県……（一二三）
四、岩手県の民話……（一二七）
五、宮城県……（一三一）
六、山形県……（一三五）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七、福島県・茨城県……（一三六）
八、千葉県の民話……（一四三）
九、栃木県……（一四七）
十、群馬県……（一五五）
十一、埼玉県……（一五八）
十二、神奈川県……（一六六）
十三、山梨県の民話……（一六八）
十四、静岡県……（一七三）
十五、愛知県……（一八一）
十六、名古屋を中心として……（一九一）
十七、長野県の伝説……（二〇一）
十八、新潟県……（二〇五）
十九、富山県……（二一一）
二十、石川県……（二一五）
二十一、岐阜県……（二三〇）
二十二、福井県の民話……（二四五）
二十三、京都府・滋賀県……（二四九）
二十四、三重県の民話……（二五六）
二十五、奈良県……（二六一）
二十六、和歌山県……（二六八）
二十七、大阪府……（二七〇）
二十八、兵庫県……（二八二）
二十九、岡山県……（二八四）
三十、鳥取県の伝説……（二八七）
三十一、広島県……（二八九）
三十二、島根県の民話……（二九三）
三十三、山口県……（二九七）
三十四、香川県……（三一二）
三十五、徳島県の伝説……（三一三）
三十六、高知県……（三一七）
三十七、愛媛県……（三一八）
三十八、北九州……（三二二）
三十九、南九州……（三三三）

第三部　宗教童話

一、仏教界……（三四三）
二、キリスト教界……（三四七）
三、絵ばなしの歴史……（三五〇）

附　参考文献図書一覧
附　全国童話団体名簿
あとがき

第一部　東京都

一、巌谷小波

内山憲尚

巌谷小波（本名季雄）は、明治三年（一八七〇）六月六日、東京市麹町区平河町に生まれる。父は旧近江藩医で、当時太政官の大史であった巌谷修（一六）の三男、母八重子は田川氏。一〇月一日死去。翌、四年継母茂は登子（横田氏）を迎え養育する。

八年公立平河小学校（後の麹町小学校）に入学。一〇才頃より松野クララ女史（独乙人）について独乙語を習う。一三年六月独乙留学中の長兄立太郎よりオットーのメルヘン集を贈られ、後年お伽話に興味を持ち、これで身を立てるに至り、事は此の本に負うところが大きい。（小波遺影）

巌谷小波（64才）

立太郎にして見ればオットーの童話集（一八八〇年）が各国の有名な童話を集めてある六百頁ばかりの絵入りの美しい本だったので、独乙語を習いはじめた小波の学習には手頃であると、友人の谷川万之助が帰朝する際に、表紙表に『……参考のためこの本を送る、自分が帰朝するまで読んでおくように、そした

ら、もっと面白い本をたくさんあげる。明治一三年六月二一日』と添え書きがしてある。

長男である自分としては父修の志を継いで医者になるべきであったが、工業の方へ進んでしまったので、弟の季雄に医者として立ってもらいたく、独乙語の方を充分にやってもらいたいという希望を抱いて、小波にその望みをかけていたのであった。

小波が大正九年、五〇才の時に出した「我が五十年」に「兄は実にこれまでに、僕の文学好きなのを嫌って、口やかましく云う許りか遂に手を下してまで圧を加へた。（中略）兄は僕の文学癖を、また必ずしも否定したのでは無い、畢竟肝腎の学課の方を、動もすればお留守にするから、それが気に入らなかったのだろう。」と言っている。

一八年、この頃より文学書を耽読し、独乙学協会学校在学中「一珍可笑夢」「かちかち山後日譚」を発表。明治二〇年（一八八七）文学結社・硯友社同人となり、機関誌『我楽多文庫』に「真如の月」を発表し、最初に「漣山人」（又は大江小波ともいう）の号を用いる。けだし、祖父の滋賀の地名の枕ことばに因むものである。

二四年一月、博文館発行の叢書『少年文学』第一編に「こがね丸」を発表し、当時の子どもはもちろん大人からも歓迎され、大正に入っても読まれた。「こがね丸」は動物の仇討物語りで、馬琴の里見八犬伝と想を同じくするものであると、今日考えられているが、小波が少年文学の世界を確立し爾後数十年にわたって「お伽噺」の世界に専念して、日本の児童文学の上に大きな光を掲げてくれた功績は実に大なるものがある。（日本児童文学45年6月）

巌谷家は代々江州水口藩の藩医であったが、遷都とともに東京へ移り太政官に勤務した。大正一一年五月一五日に出版した「小波身の上噺」ではこういっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人は僕をお坊さん育ちと云ふ。成る程さうかも知れない。僕の生まれたのは、丁度、父が旧藩の医者から転じて、大政官の役に成って、御遷都と共に東京に移住してから、後間もない明治三年の事だ。其頃政府の役人と云えば、頗る巾の利いたものだったから、随って僕なぞも、所謂『おんば、日傘』星ケ岡の山王へお宮参りの時なぞは、随分、振ったものだったらうが、残念ながら当人は、そんな事までは覚へて居ない。

巌谷小波は貴公子然とした風采と、上品な風格を持っていたのも、生育環境、家庭環境からくるものと考えられる。その一面、祖母の感化を受けて自然や芸能に興味を持ったこともたしかである。

また妙に植物が好きで、庭の隅から芽生を取って来ては、それで小さな盆栽をこしらえたり、また石を拾って来て、箱庭を造る事も好きだった。これから思うと、庭が広かった事や、その中に花壇があって、祖母が始終植木いじりをして居たから、それにかぶれたのだろう。

それから今一つ、神楽の真似が大好きだった。これは山王や天神の縁日に、その都度必ず出かけて行って、神楽堂の下で半日暮した位だったから、何をしても真似をせずには居られないので、ある時父が古道具屋から獅子頭に、面に、太鼓などのかなり大きいのを買って来てくれた時は、嬉しくて、夜も寝られない位だった。

神楽が好きな位だから、無論能や狂言にも子供の割には趣味を持って居た。それも矢はり祖母の感化だ。祖母は御所奉公をして居たのだから、随って此種の見物が好きで、まだよくも解らない僕を、梅若やら、金剛やらの舞台へ、しばしば連れて行ってくれた。

祖母の感化はこればかりでは無い、十才にもならないのに、碁石を並べる事を覚えたり、天狗俳諧を面白がったり、三十一文字を列べて見たり、果ては画を書きおぼえたのも、みな祖母に可愛がられたお蔭だ。

その時分の句で、今だに覚えているのが一。

山王祭

十五日今かくとまつりかな

（小波身の上噺）

一一才の時にその頃下谷の御徒士町にあった塩谷時敏の漢学塾に入った。

稽古に通う途中に秋葉原があり、その頃はここに遊園地があって、のぞきからくりだとか、葦簾（よしず）張りの寄場小屋があって、講釈や祭文（浪花節の前身の舌耕芸術）の岩見重太郎伝を聞くのが何よりたのしみであったと「小波身の上噺」に書いている。

父の巌谷一六居士は、小波を医者にしたいと考えて、独乙語などを習わしたが本人は医者になることを嫌って文学の道へ進んで行った。

ある時、僕は父母に連れられて新富座の芝居を見に行った。今でこそ古ぼけた小屋だが、その頃の新富座は、東京随一の大劇場で、団（市川団十郎）、菊（六代目菊五郎）、左（市川左団次）の三名優は必ず、ここに出るのであった。

また今の様に、子供のためのお伽芝居なぞは、とても見る事が出来なかったからこういう大人向きの芝居を子供もさかんに見たのである。

で、僕達が桟敷に居ると、丁度その隣に、家へ来る竹内と云ふ医者が、家族で見物に来ていた。

ところが幕数も進んで、いよいよ面白くなろうという時に、ふと隣桟敷を見ると、他の者は皆いるが、竹内先生の姿が見えない。

『先生はどうしたんでしょう』

と、僕は母に聞いて見ると、

『先生は御病人が出来たから、其方へいらっしやったんだよ。』
という。
『お家で誰か悪くなったの？』
『いゝえ、お家の方は皆来ていらっしゃるが、どこかよそに病人が出来て、そのお迎えが来たんだよ。』
僕はそれで初めて解ったが、それと同時に、直ぐまたこう思った。
『医者ってもなア厭な商売だなア！いくら面白い芝居があっても病人が出来ると見ずに帰らなきゃならない。いやだ〳〵、医者なんぞになるもんじゃない。』（小波身の上噺）
明治二〇年（一八才）から日記をたんねんにつけている。

二月十一日　晴

此夜誘われて、初めて番町教会へ行った。これは学校の先生のヘーリングと云う人が、此所で演説をすると聞いたからである。然るに生憎先生は出ないで、只の牧師の説教がある様だったから、其儘出て寄席へ行ってしまった。寄席はおもに落語で、中に今の円右も、其頃から其名で声色を使って居た。
円右、柳家小さん（今の小さんの先々代）はその落語界を代表する名人で、小さんの芸が繊細な写実性なのに対して円右の芸は洒脱枯淡であった。高座へ登るのにもなかなかしゃれた服装をして、着物とそろった色の羽織など着ていた。語り口なども淡々として、後世小波のお伽口演と相通ずるものがあったように思われる。円右の話など好んで聞いたところを見ると、知らずしらず円右の影響を受けていることが考えられる。
小波は明治二七年（一八九四）博文館大橋新太郎に入り、「少年世界」主筆として少年世界にお伽話を毎号執筆する。外に明治二七年（一八九四）「日本昔噺」二四編発行（複刻本が出されている）、続いて「日本お伽噺」一〇〇

編を発刊する。

翌二九年、黒田湖山、西村渚山、尾上新兵衛（久留島武彦）、生田葵等を寄食させる。彼等のために文学談の会合を木曜日に開き、木曜会と称した。のち、永井荷風、押川春浪、山内秋生などが会員として加わった。ただし木曜会は童話口演の研究会ではなく文芸を中心とした話し合いの会で、小波を囲んでの懇談会といったものであった。（山内秋生談）

お伽話（童話）の口演に関しては、大正九年五月一三日発行の「我が五十年」で次のようにいっている。

然るに私がお伽噺の創作に着手して後（二七歳の頃であったと思う）……（明治二九年）私が京都に旅行した時、ある小学校長から『是非私の学校に来てお伽噺をして下さい』といふ依頼を受けた。しかし私はお伽噺を書く事は書いていたが、その時までは未だ、一度もお伽噺の口演と云ふものをしたことがなかったので、その事を話した処が『いや貴下のお伽噺は皆生徒が面白がって読んでいるのですから、それを実地に口演して下さるなら、なお興味を感じることでせう。まげて口演して貰ひたい』と云うので遂に――最初のお伽噺口演を試みた。しかし非常に話しにくいものであると云うことを知ると同時に、ふと『書く時と話す場合とは余程に違うものである。それ故に書くために少しは話すことも必要である。』と気付いてその後はお伽噺を作る際に『話す』と云うことを考えて、特に注意するようになったのである。

その後（明治三一年）私は大日本婦人教育会の依頼に応じて家庭講演及びお伽噺口演をやることとなったが、この頃大日本婦人会の創始者とも云うべき松本荻江刀自が達者で主に働き、戸川残花氏が顧問という格でいろいろ世話をしておられた。戸川氏と私とは俳句の友達で、角田竹冷氏の処でよく落ち合ったものである。そういう関係から私に『婦人教育会の方でも新しい方面に活動したいと思うておる。それについて第一番手に子供

部を置いて、君は子供に口演することは旨いのだからお伽噺がして貰いたい』と云うのであった。勿論私は拒むべき理由はなく、殊に当時の私は文学者の中でも、小説家ではなく、お伽噺という新天地の開拓をして既に博文館の『少年世界』を主幹していたので、お伽噺の宣布のために、この好機会を喜んで捕えた。大日本婦人教育会の嘱託を受けることになった私は、毎月一回宛学院女学部及び幼稚園の生徒にお伽噺の口演をすることになったのである。これが東京に於いて――否、ほんとうに公開の席上においてのお伽噺口演の第一歩であったと云うことが出来る。

京都の小学校長のすすめによって小波のお伽噺口演が始まった。これは、彼がしばしば好んで聞いた落語、講談、祭文語り等の舌籍芸衆乃至は歌舞伎、能、狂言といった芸能が話す上の基礎となっているものと考えられるし、こうしてお伽噺（童話口演）が小波によって開拓されることになったのである。（この京都の小学校長の氏名は今となってはさがしてもわからない。）

尾上新兵衛（久留島武彦）が近衛師団経理部に勤務中、尾崎紅葉を訪ね、紅葉の紹介状を持って小波を訪ねる。明治三五年横浜に転属、明治三六年七月一五日小波を顧問として、横浜市蓬莱町メソジスト教会内にお伽倶楽部の第一回のお伽会を開いている。（熊のしりもち）

「我が五十年」中「転居の十年」の項に

間もなく（明治二九年）郷里から、一個の少年は上京して来て、僕の家に同棲する事となった。それは今の黒田湖山子である。之に今迄の池田瓦山を合はせて、上下三人の男世帯、これでもまだ広過ぎた。

それを見て尾上新兵衛事当時の陸軍三等書記、久留島武彦子も、下宿から此所へころげ込む。瓦山子が郷里に帰ると、入れちがつて生田葵山子が来る。大分書生部屋が賑やかになった。

それで此等の面々が、時々僕を捕へては、文芸上の質問をする、僕もまた出来得る限りはこれに答えるのを否まなかったが、何分毎日出勤の身でゆっくり話す間が無いので、遂に木曜日の晩だけを、此等の人々の為に割いて、文芸講話の時間に当てた。是れぞ木曜会の濫觴（らんしやう）で今から指を数へて見ると（大正九年から）実に十三年前のことだ。

巌谷小波のお伽話の口演の仕事は小波が「少年倶楽部」や「世界お伽噺」によって日本中の子どもたちになじみになっているので、興味を持って受け入れられ、博文館にその口演を希望するところが増えてきた。しかも東京からわざわざ大先生が来られて、お伽話を話していただくというので、「私の学校の生徒にも是非聞かせていただきたい」と言うので二校、三校と合同になり、聴衆も次第に数が増して大衆化する傾向となった。

明治二八年一一月、近衛師団経理部に勤務中の久留島武彦は尾上新兵衛の名で「少年世界」に「戦塵」を連載した。彼は二七年関西学院在学中キリスト教伝道隊演説を行ない、また日曜学校の生徒に聖書の話をした体験から、小波のお伽口演に共鳴した。こういう久留島武彦の参加を得たので、お伽口演は実を挙げたのである。

併し世間は私共のお伽噺に対する努力に、決して風馬牛ではなかった。私共を招聘するは、ただ単に狭い東京のみではなく、各地方からも甚だ少からぬ要求があった。こゝに於いて久留島君の凱旋と共に、博文館は久留島君を迎えて、託するに巡回講演部主任をもってすることになり、各地方の招聘に応じてお伽口演を試みたものである。その頃は地方を巡廻する場合、幻燈機械を携へて行ったものである。が、或時京都で機械が破損して役に立たぬ事になった。併しその為に招聘された地方を断るわけにも行かぬ。と云うので白兵戦——お伽噺の講演丈を試みることなり、私共は京都から大津地方にかけて巡回したこともある。更に久留島が東北地方を巡回していた時、汽車中で幻燈機械が爆発して、罰金を取られたなどと云う逸話もある。そしてその後と云

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com